

扞関によって連結された秦漢帝国の南方交通

— 漢越外交に介在する符の役割 —

莊 卓 燐

論文要旨

本稿では「二年律令・津関令」に見える扞関を対象に考察を加え、扞関の秦漢帝国に対する特殊性・重要性について検討した。その上で、扞関の周辺に展開された外交関係进行分析し、漢帝国の遠隔支配において符が果たした役割を指摘した。

戦国から秦漢にかけて扞関に関する史料を整理した結果、扞関は東西の交通を繋ぐ役割だけではなく、南北交通を繋ぎ漢帝国の「首都圏」と南方の辺境を連絡する役割があったとわかった。扞関を要所とする漢代の交通の実態において、巴蜀地域・旧楚地域・長沙王国・南越王国との連絡が見られる中で、越との接続は最も重要なものであったと想定される。そして、漢越の国交において符が介在したと考えられる。すなわち、漢は越との交通路線を制限し辺境地域の紛争を抑止する意図のもとに、特定の関所しか通行できない限定的な通行証である符を用いた。

一方で、都尉による扞関管轄を参考とすれば、漢代関所の運営は地方に一任し、そこで徴収した税金を関所の運営に当たらせたと窺える。関所の存亡は、当該地域の貿易状況及び国交状況に左右される。ゆえに、漢越外交の消滅は扞関の重要性の低下に直接的な影響を及ぼした

と考えられる。

キーワード【扞関、符、漢越外交、都尉、関市】

一、関心の所在

『張家山漢簡』「二年律令」⁽¹⁾には、津（渡し場）関（関所）を通過する時の規定を記した「津関令」の次の条文が見られる。「二年律令・津関令」簡四九二に

二、制詔御史。其令扞関・郎関・武関・函谷【関】・臨晋関、及諸其塞之河津、禁毋出黄金・諸奠黄金器及銅、有犯令^{四九二}

（二、御史に制詔す。其れ扞関・郎関・武関・函谷【関】・臨晋関、及び諸々の其の塞の河津に令し、禁じて黄金・諸々の奠黄金器及び銅を出だす毋からしめ、令を犯すこと有らば…）⁽²⁾

とある。その内容は津関を通過する際に、黄金器類を携帯してはならないと規定しており、物資供給の流動性にかけられた規制に関連するものだと思う。具体的には、五つの関所の名称が挙げられている。この物品移動の規制から、漢代の行政区画において、右記五関の内と外とは異なった行政区域であるように見える。すなわち、漢帝国の支配はこの五関によつて区切られ、その内側のみが漢の直轄支配領域であるように見える。また、同様の性質を持つ条文は次の簡にも見られる。「同」簡五〇六に

□議。禁民毋得私買馬以出扞関・鄖関・函谷【関】・武関及諸河塞津関。其買騎・輕車馬、吏乘・置伝馬者、県各以所買^{五〇六}（□議す。民に禁じて私に馬を買ひ以て扞関・鄖関・函谷【関】・武関及び諸々河塞の津関より出づるを得ること毋かれ。其れ騎・輕車の馬、吏の乗・置の伝馬を買ふは、県は各々〔以所買〕…）

とある。右によれば、一般庶民が私的に馬を購入した場合、一定の範囲内での使用が決められており、範囲「外」に持ち出してはならないと規制されている。その範囲として、扞関・鄖関・函谷関・武関などの名称が取り上げられ、臨晋関を除いた前記「同」簡四九二に記された四関の名称が見える。右記の条文は、個人目的で馬を購

入した、漢帝国の民の移動範囲について言及している。その移動範囲の限界である四関が、前記の五関と同様に漢帝国の支配範囲を区切っているように見える。

多くの論者は、この四関／五関の内側こそいわゆる関中地域であるとみなし、漢代初期の「中央」ひいては「首都圏」の範囲はこれらの関所の位置に比準されると論じる。王子今氏は、簡四九二の五関が描く南北の縦線を、秦始皇帝期の咸陽―胸県⁴が描く横線と対比し、古代地理把握技術の広大さを説く中で、「大関中」（広義の関中）は法律の明文によつて規定され、その地理的観念は当時の人々に広く認識されていたとする。一方で、これらの関所を関中地域の基準とする意見に対して、慎重な態度を取る姿勢も見られる。何より、これらの関所の位置が中央の直轄地である秦の内史もしくは漢の三輔を包み込む形になっていない、との点はこれらの関所を関中地域の基準とすることに對する有力な反論となろう。

「関中地域」の概念について、従来では「関の中側にある地域」との考え方が根強い。『史記』卷二漢興以來將相名臣年表に「高祖）入りて関中を都とす」とあり、『史記索隱』はそれに注して「東は函谷、南は嶢武、西は散関、北は蕭関。四関の中に在り、故に関中と曰ふ」との説明を加えた。東西南北の四関に包み込まれ、四関の中にあるが故に「関中地域」との理解は、一般的に受容されていると思われる。かの定説と比べて、「津関令」簡四九二に見える五関は、その内の一つがほかの四つの関所とかけ離れた場所に位

置するせいで、内史／三輔を包围する形が崩れる。「同」簡五〇六に見える四関にも同様の問題を指摘できる。中央の直轄地との連携が薄く、首都からかけ離れた関所と指摘されるのが、すなわち扞関である。

戦国／秦漢の国家形成において、関所の設置は都城の所在と密接な関係を持つ。藤田勝久氏は天水放馬灘秦墓から出土した地図を用い、秦の領域形成と放馬灘付近の関所群との関連性を分析し、都を中心とする秦の領域支配には、関所を要所とし交通路によって分散地域を支配する側面があったと指摘する。都城と関所の関係に焦点を当てて「津関令」に見える関所に注目すると、戦国期の秦魏戦争の中で設置された臨晋関⁽⁶⁾、秦末において項羽軍に攻撃された函谷関、劉邦軍に攻撃された武関、酈商軍に攻撃された郛関⁽⁷⁾、などの事象から、この四つの関所は秦の都咸陽を防衛する役割があったと裏付けられ、その機能は前漢初期における都長安の防衛に継承されたと考えられる。これらに対して、咸陽もしくは長安を防衛する扞関の役割について、言及した伝世史料は確認できず、「津関令」に見える関所の中で扞関の異色がより際立つ。

しかしながら、「津関令」は中央政府が頒布した律令である以上、朝廷で議論を重ねて決議したものに相違ない。その条文に見える四関／五関の名称は、単純に一例として挙げられたのではなく、多少なりとも中央にとって特別な意義を持つ可能性は高い。本稿では扞関を考察対象とし、秦漢帝国における扞関の発揮した役割を明白に

し、その設置と南方地域との関係性を探求したいと思う。

二、扞関の北上交通

「二年律令・津関令」に見える扞関について、『史記』『漢書』などの伝世史料からは記載を確認できないが、陳直氏は『封泥攷略』卷四・五三頁・裏「扞關長印」、『同』卷四・五四頁・裏「扞關尉印」を引き、出土文物を用いて扞関の存在を肯定する。氏は呉式芬氏の考察を踏襲し、扞関とはすなわち伝世史料に見える扞関のことであるとし、伝写の誤りによって扞関は扞関とされるようになったと説く。また、『張家山漢簡』整理小組は扞関を扞関として捉える意見に同意した上で、扞は音通で江に作る場合があると理解する。名称こそ異なるが右のいずれにしても同一の地を指し、扞関を扞関（江関／捍関⁽¹⁰⁾）とするのは現状の有力な説である（混乱を避けるため、史料の表記は異なるが本稿では「扞関」で統一する）。

扞関の位置について、『漢書』卷二八地理志上巴郡魚復県条に江関都尉が見え、およそ今の四川省奉節県の東にある。その設置は、戦国時代の楚国によるものであるとされる。『史記』卷四〇楚世家に

肅王四年、蜀伐楚、取茲方。於是楚為扞関以距之。

（肅王四年、蜀楚を伐ち、茲方を取る。是に於いて楚扞関を為

りて以て之を距む。)

とある。楚の肅王四(前三七七)年に楚は蜀の侵攻を受け、それに對抗するために扞関を設置した。蜀と楚との対抗関係から設置された扞関には、楚の都郢を防衛する役割があったと考えられる。その後の発展として、『史記』巻六九蘇秦列伝に

秦之所害莫如楚、楚彊則秦弱、秦彊則楚弱、其勢不兩立。故為大王計、莫如從親以孤秦。大王不從親、秦必起兩軍、一軍出武関、一軍下黔中、則郢郢動矣。

(秦の害する所は楚に如かず、楚彊となれば則ち秦弱となり、秦彊となれば則ち楚弱となり、其の勢いは兩立せず。故に大王の為に計るに、從親して以て秦に孤くに如かず。大王從親せざれば、秦必ず兩軍を起し、一軍は武関を出で、一軍は黔中に入り、則ち郢郢動かんや。)

とある。右の記述を参考にすれば、巴蜀の支配権を確立した秦は、秦—楚の郢を侵攻する武関ルートと、秦—蜀—楚の郢を侵攻する黔中ルート、と二通りの進軍路線があったことが窺える。この時点で、扞関の主な警戒対象は蜀から秦に切り替わったと言える。秦によって設置された関所とは異なり、扞関は楚の都郢の防衛を目的として設置されたため、「津関令」に見える他の関所とは当初より目的

を異とし、時代が変遷しても咸陽城もしくは長安城の防衛に直結できないわけである。しかし、都城と関所との関係からして、扞関は決して例外的なものではなく、関所そのものとしての一般性を持つことがわかる。

秦の恵文王九(前三二六)年、秦は蜀を滅ぼす。その後暫くの間、扞関は楚が秦に対抗するための前線基地としての役割を果たしていたが、『史記』巻七三白起列伝に

白起攻楚、拔郢、鄧五城。其明年、攻楚、拔郢、燒夷陵、遂東至竟陵。楚王亡去郢、東走徙陳。秦以郢為南郡。白起遷為武安君。武安君因取楚、定巫、黔中郡。

(白起楚を攻め、郢・鄧の五城を抜く。其の明くる年、楚を攻め、郢を抜き、夷陵を焼き、遂に東のかた竟陵に至る。楚王郢より亡去し、東のかた走りて陳に徙る。秦郢を以て南郡と為す。白起遷りて武安君と為る。武安君因りて楚を取り、巫・黔中郡を定む。)

とあるように、秦の昭襄王期に名将白起の引率のもとで、秦軍は楚の都郢を陥落させ、南郡の設置に導いた。同時に、秦軍が郢を中心とする楚国中央部を占拠したため、楚の西部にある巫、黔中は孤立状態となり、白起はそれらを攻略して秦の支配範囲を拡大させた。地理的位置からして、この時点で扞関は秦の支配下に置かれるよう

になったと推定される。のちに、秦の支配領域は漢帝国によって継承され、扞関も漢の支配下に置かれるようになったのであろう。そして時代が下って、『明史』巻四四地理志荊州府条に

長陽州西南。東南有清江。西有舊関堡、西南有蹇家園、南有漁洋関三巡検司。南有古捍関。西有梅子八関。

（長陽州の西南。東南に清江有り。西に旧関堡有り、西南に蹇家園有り、南に漁洋関三巡検司有り。南に古の捍関有り。西に梅子八関有り。）

とあり、『清史稿』巻六七地理志宜昌府条に

明隸夷陵州、属荊州府。…有資丘鎮、古扞関。

（明は夷陵州に隸し、荊州府に属す。…資丘鎮、古の扞関有り。）

とあるように、近現代までその痕跡を残した。

秦の「統一」や秦末漢初の動乱はあったが、土地・交通路そのものは簡単に變化するものではない。扞関の地理上の役割は、設置当初の戦国時代から秦漢時代にかけて、時代が變遷してもなお一貫するように考えられる。蜀を対象に設置された扞関は、まず巴蜀地域

との接続が見られる。『史記』巻七〇張儀列伝に

秦西有巴蜀、大船積粟、起於汶山、浮江已下、至楚三千餘里。

舫船載卒、一舫載五十人與三月之食、下水而浮、一日行三百餘里、里數雖多、然而不費牛馬之力、不至十日而距扞関。扞関驚、則從境以東盡城守矣、黔中、巫郡非王之有。

（秦は西に巴蜀有り、大船に粟を積み、汶山より起り、江に浮んで已て下る。楚に至るまで三千餘里。船を舫なべ卒を載せる、一舫に五十人と三月の食を載せ、水に下りて浮ぶ。一日に行くこと三百餘里、里數多しと雖も、然れども牛馬の力を費やさず、十日に至らずして扞関に距らん。扞関驚かば、則ち境より以東は尽く城守せん。黔中・巫郡は王の有に非らざるなり。）

とあるように、汶山を源流とする江水（揚子江）は西から東へと巴蜀地域と旧楚地域を貫通する。右の張儀の言葉は、秦の進軍は江水に下って扞関に到達でき、そして扞関さえ攻略すれば黔中郡・巫郡を容易く攻略できると豪語する。誇張の表現ではあるが、扞関を中心とする東西交通を概観できる一文である。すなわち、江水沿いにある扞関は、巴蜀地域の東の果てに位置し、巴郡から黔中郡・巫郡へ進入する時の要所であると窺える。逆の視点から見ても、『史記』巻一一六西南夷列伝に

始楚威王時、使將軍莊躡將兵循江上、略巴、蜀、黔中以西。莊躡者、故楚莊王苗裔也。躡至滇池、地方三百里、旁平地、肥饒數千里、以兵威定屬楚。欲歸報、會秦擊奪楚巴、黔中郡、道塞不通、因還、以其衆王滇、變服、從其俗、以長之。

(始め楚の威王の時、將軍の莊躡をして兵を將ゐ江に循ひて上り、巴・蜀・黔中以西を略せしむ。莊躡は、故の楚の莊王の苗裔なり。躡滇池に至る。地は方三百里、旁く平地にして、肥饒なること數千里、兵の威を以て定めて楚に屬さしむ。歸りて報ぜんと欲するも、秦撃ちて楚の巴・黔中郡を奪ふに會ひ、道塞がりて通ぜず。因りて還り、其の衆を以て滇に王たり、服を變じ、其の俗に従ひ、以て之に長たり。)

とあるように、楚の進軍も江水沿いの路線を使用していたことがわかる。その際、江水沿いにある扞関の通過が想定される。扞関を連絡口とする巴蜀地域と旧楚地域との接続は、水路のみではなく陸路にも通じ、一方通行のものではなく双方方向のものだとわかる。その上で、楚の將軍莊躡は秦の巴・黔中の侵攻を受け、楚国に戻る術を失つて当地に留まつたと記されている。このことを鑑みれば、巴郡と黔中郡は当時の東西を連絡する唯一の経路であり、その両地の境目に位置する扞関も、連絡口として重要な役割を發揮していたと考えられよう。

また、扞関を要所とする巴―楚の連絡は、前後漢移行期に至つて

も変わらない。

ア、『後漢書』列伝第三公孫述伝

(建武) 六年、述遣戎与將軍任滿出江関、下臨沮、夷陵間。：又遣田戎及大司徒任滿、南郡太守程汎將兵下江関、破威虜將軍馮駿等、拔巫及夷陵、夷道、因抛荊門

(建武) 六年、述戎与將軍の任滿を遣はして江関を出で、臨沮・夷陵の間に下らしむ。：又た田戎及び大司徒の任滿・南郡太守の程汎を遣はして兵を將ゐて江関に下らしめ、威虜將軍の馮駿等を破り、巫及び夷陵・夷道を抜き、因りて荊門に抛る。)

イ、『後漢書』列伝第七岑彭伝

(建武) 十一年春、彭(岑彭)与呉漢及誅虜將軍劉隆、輔威將軍臧宮、驍騎將軍劉歆、発南陽、武陵、南郡兵、又発桂陽、零陵、長沙委輸棹卒、凡六万余人、騎五千匹、皆会荊門。：斬任滿、生獲程汎、：自率臧宮、劉歆長驅入江関：彭到江州、以田戎食多、難卒拔、留馮駿守之、自引兵乘利直指墊江、攻破平曲、收其米數十万石。

(建武) 十一年春、彭(岑彭)は呉漢及び誅虜將軍劉隆・輔威將軍臧宮・驍騎將軍劉歆と、南陽・武陵・南郡の兵を發し、又た桂陽・零陵・長沙の委輸棹卒を發すること、凡そ六万余人、騎五千匹、皆な荊門に会す。：任滿を斬り、程汎を生獲し、：

自ら臧宮・劉歆を率ゐて長驅して江関に入る…彭は江州に到り、田戎の食多く、卒かに拔け難きを以て、馮駿を留めて之を守らしめ、自ら兵を引き利に乗じて直ちに墊江を指し、攻めて平曲を破り、其の米数十万石を収む。）

右記の史料は、後漢初期における公孫述政権の興亡に関わる。巴蜀地域を拠点とする公孫述政権の東進において、ア.の史料が示すように公孫述の部下である田戎と任滿は扞関を通過して臨沮・夷陵の間に進出した。のちに、軍事行動へ移行した際にも扞関を経由して巫、夷陵、夷道を攻略した。一方で、イ.の史料が示すように、漢が公孫述政権を討伐するため、南陽・武陵・南郡の兵と、桂陽・零陵・長沙の戍卒を寄せ集めた岑彭の軍勢は、扞関を経由して江州に至り、墊江・平曲を攻略して西へ進行した。以上の史料から、先秦時代に開発された巴―楚の交通路は、前漢時代ないしは後漢時代にも継承され、扞関は当該時期の地域区分に即し、巴郡と南郡との連絡、ひいては益州と荊州との連絡を担う役割があつたと確認できる。

江水をなぞる横の交通以外に、扞関は漢中郡と黔中郡（漢の武陵郡）からなる縦の交通を連繫させる役割があつたと推定される。

『漢書』卷二八地理志上巴郡条に

巴郡、秦置。…魚復、江関、都尉治。
（巴郡、秦より置く。…魚復、江関、都尉の治むるところなり。）

とあり、『後漢書』志第三郡国志巴郡条に

巴郡、秦置。…魚復扞水有扞関。
（巴郡、秦より置く。…魚復の扞水に扞関有り。）

とあり、扞関の所在について伝世史料には巴郡魚復県にあつたと明記される。木村正雄⁽¹²⁾氏の整理によれば、魚復県とは古の魚国・庸国・南蛮国の地によつて構成される。それと以下に引く『水経注』の記述を手掛かりにすれば、魚復県の一部は庸国または上庸国に作り、漢中郡の上庸県の前身に当たる。『水経注』沔水注に

『春秋・文公十六年』、楚人、秦人、巴人滅庸。庸小国、附楚。楚有災不救、拳群蛮以叛、故滅之以為県、属漢中郡、漢末又分為上庸郡。

（『春秋・文公十六年』に、楚人・秦人・巴人は庸を滅ぼす。庸は小国たり、楚に附く。楚災有るときに救はず、群蛮を挙げて以て叛き、故に之を滅ぼして以て県と為す。漢中郡に属し、漢末又た分けて上庸郡と為す。）

とある。春秋時代の魯の文公一六（前六一）年、楚は庸国を滅ぼして県を設置した。秦漢時代に至っては漢中郡の属県となり、後漢に至っては郡として独立し上庸郡となる。秦漢時代の地域区分においてこそ、上庸と魚復は異なる県として設置されたが、古来ではその両地を跨ぐ政権が存在したとわかる。上庸県と魚復県の一部が元来一つの国のものであれば、行政支配において両地を繋ぐ交通路は存在すると見込まれる。古の庸国を背景に魚復県と上庸県の地理上の接続は肯定され、扞関を要所として漢中郡と黔中郡の縦の繋がりを特定することができる。

漢中郡は中央の直轄地である三輔地域と隣接する。藤田勝久⁽¹³⁾氏が紹介したように、漢中郡の郡治である南鄭（現漢中市）と長安（現西安市）との接続は四つのルートが存在する。①子午道、②褒斜道、③故道を通るルート、及び④武都郡と西漢水を通って、甘肅省礼県から天水市の方面に行くルートである。従来の指摘通り、②③④は西南への交通に使用される路線であり、三輔地域と巴蜀地域の接続が主な役割である。それと比べて、②③④よりずっと東に位置する①の子午道は、巴蜀地域との接続においては不便であり、西南の交通開発が進むにつれて衰退していくと思われる、後漢順帝期⁽¹⁴⁾には廃止されるようになった交通路である。しかし、本稿で関中と南方との縦の繋がりに注目した結果、①の子午道ルートには長安—漢中—扞関を繋ぐ重要な役割があったと指摘することができる。

もとより久村因氏⁽¹⁵⁾が指摘したように、漢代の漢中郡は、秦によって開発された西の部分（南鄭部）と、楚によって開発された東の部分（上庸部）の二部分で構成される。秦が上庸部の支配権を獲得したことで、都咸陽との直通道路を開拓する必要性が生じた。ところが、周知の通り咸陽の南方は、太白山をはじめとする秦嶺山脈に囲まれる。したがって、関中地域と漢中郡上庸部を連結させるには、秦嶺山脈を貫通した道路を開拓しなければならないのである。子午道はこうした背景のもとで開通されたのである。そして、秦嶺山脈を横断する役割を持った道路として、子午道の使用は秦のみならず漢の時代にまで継承されていた。その経路について、『漢書』巻九 九王莽伝上に

子午道從杜陵直絶南山、徑漢中。

（子午道杜陵より直りて南山に絶り、漢中に徑く。）

とあるように、子午道とは、長安の南に位置する杜陵から出発し、秦嶺山脈を越えて漢中郡に到達する交通路である。⁽¹⁶⁾ 子午道が開通した時期について、『史記』巻七〇張儀列伝に

秦遣張儀從子午道伐蜀。

（秦張儀を遣はして子午道より蜀を伐たしむ。）

とあるように、戦国秦の時代にすでに開通され、使用した痕跡が見られる。戦国秦・統一秦の時代を経て、関中地域を掌握した漢も子午道を使用していたと考えられる。秦が滅亡し項羽による封建体制が建立された間もない内に、楚の義帝は死去した。項羽政權が義帝暗殺の張本人だと見定めた漢王劉邦は、天下に檄文を發し項羽討伐に出兵した。その状況について、『史記』卷八高祖本紀（二年条）に「悉く関内の兵を發し、三河の士を収め、南のかた江漢に浮き以下る」とある。具体的な移動経路について、『史記正義』はこの条文に対して次のように考証した。

南收三河士、發関内兵、從雍州入子午道、至漢中、歷漢水而下、從是東行、至徐州、擊楚。
（南のかた三河の士を収め、関内の兵を發し、雍州より子午道に入り、漢中に至り、漢水を歴て下り、是れより東行し、徐州に至り、楚を撃つ。）

とある。唐の張守節の考証によれば、劉邦軍は子午道を経由して雍州から漢中に渡ったという。旧秦地域を統合した漢王国は、東進して南方の楚を攻撃するため、子午道を経由して漢中に至り、漢水を下って徐州に向かったのである。これを鑑みれば、子午道は楚漢戦争期にも軍事利用されていたとわかる。しかも、子午道は軍隊が通過できるほどの規模を持つ交通路であると窺える。

このように、戦国時代より開通が確認され、楚漢戦争期にも使用されていた子午道は、当該時期の咸陽／長安―漢中の連絡を支えた。楚―秦―漢の継承関係背景にして、秦漢帝国の中央部から扞関への縦交通の存在は肯定される。これにより、長安から杜陵へ移動し子午道を経由して漢中郡に入り、漢中郡の属県である庸県へ移動しそこから魚復県に入り、魚復県にある扞関を通過して黔中郡に入る（長安―杜陵―子午道―漢中―庸―魚復―扞関―黔中）ルートが見えてくる。さらに、山田勝芳氏は（書き下し文は筆者による）『睡虎地秦簡』『法律答問』簡五七・簡五八の

「發偽書、弗智、費二甲。」今咸陽發偽伝、弗智、即復封伝它県、它県亦伝其県次、到関而得。今当独咸陽坐以費、且它県当盡費。咸陽及它県發弗智者当皆費。
（偽書を發ぎ、智（知）らざれば、費に二甲。」今咸陽に偽伝を發ぎ、智（知）らざりて、即ち復た它県に伝を封じ、它県も亦た其の県次に伝え、関に到りて得。今独だ咸陽のみ坐として費を以てするに当たるか、且つ它県にも尽く費するに当たるか。咸陽及び它県發ぎて智（知）らざる者皆な費に当たる。）

を引用し、秦代の規定では首都の咸陽から多くの県を通過して、⁽¹⁷⁾「関」に至るまで関所を通過した形跡が見られないと指摘する。加えて、氏は孟嘗君の故事を取り上げ、咸陽と関（函谷関）の間に内

関がなかったことを秦の実情とする。氏が想定した状況が、「津関令」において函谷関と並列される扞関にも通用するのであれば、南方から来訪した旅行者は単一の通行証を用いて扞関を通過したのち、ほかの関所を経由することなく咸陽に入れる。そして秦律を継承した前漢初期においても、同じ経路で都長安に入れると推定される。この点からして、扞関は秦漢中央部と南の周縁地域を接続する連絡口として捉えられよう。漢の都長安と扞関との間に、地理的な隔たりこそあるが、首都―(内側) 郡・県―関所―(外側) 郡・県の接続関係からして、扞関までの範囲は漢にとつての内側として捉えられる。したがって、扞関までの範囲を漢帝国の直轄支配領域として捉え、扞関を関中地域の区切りとする意見は首肯できる。しかも、首都と扞関の間にあるのは、漢王国の受封地であった漢中郡であり、漢帝国発祥の地でもある。「関中」の地域觀念に漢中郡を包括して南へと伸ばしたのは、漢初の王国時代の遺産であつたのかもしれない。

三、扞関の南下交通

前節では、扞関を通過して北上するルートについて考察した。本節では、逆の視点から南下するルートについて考察したいと思う。前述したように、扞関の南方交通は黔中郡に至る。この南下ルートは、より正確に言うと、江水沿いにある扞関を通過し、江水を渡つ

て黔中郡を経由して江水以南の領域に進出する交通路である。江水以南の地域は、中華世界にとつて古来より未開の地であるとされるが、およそ秦漢時代より開発されるようになる。すなわち、『漢書』卷一高帝紀下(五年正月条)に

詔曰、故衡山王吳芮与子二人、兄子一人、從百越之兵、以佐諸侯、誅暴秦、有大功、諸侯立以為王。項羽侵奪之地、謂之番君。其以長沙、豫章、象郡、桂林、南海立番君芮為長沙王。

(詔して曰く、故の衡山王の吳芮は子二人、兄の子一人と与に、百越の兵を従へ、以て諸侯を佐け、暴秦を誅し、大功有りて、諸侯立てて以て王と為す。項羽の侵奪の地、之を番君と謂ふ。其れ長沙・豫章・象郡・桂林・南海を以て番君の芮を立てて長沙王と為す。)

とあるように、百越の兵を集結させた吳芮は、反秦戦争及び楚漢戦争の功績により、長沙・豫章・象郡・桂林・南海を領地とする長沙王として封建される。ここで見える長沙・象郡・桂林の地は、まさに黔中と隣接する南方の地域である。漢帝国は間接支配の形で江水以南地域の開発に取り組んだと言える。ところが、『同』同高帝紀下一二年一二月条の「詔して曰く、南武侯の織亦た粵の世なり、立てて以て南海王と為す」に付けられた文穎の注では次のように指摘する。

文穎曰、高祖五年、以象郡・桂林・南海、長沙立呉芮為長沙王。象郡、桂林、南海属尉佗。佗未降、遙虚奪以封芮耳。後佗降漢、十一年、更立佗為南越王、自此王三郡。芮唯得長沙、桂林、零陵耳。

(文穎曰く、高祖の五年、象郡・桂林・南海・長沙を以て呉芮を立てて長沙王と為すも、象郡・桂林・南海は尉佗に属し、佗未だに降らず。遙かに虚奪して以て芮を封ずるのみ。後に佗は漢に降り、十一年、更めて佗を立てて南越王と為し、此れより三郡に王たり。芮唯だ長沙・桂林・零陵を得るのみ、と)。

つまり、漢帝国は象郡・桂林・南海・長沙を領地として呉芮を封建したが、事実上象郡・桂林を領有したのは尉佗の南越王国である。ゆえに、黔中郡との接続は、長沙と南越の両方面から考えなければならぬのである。¹⁸⁾

三―一、長沙地域

黔中郡の東は長沙地域と隣接する。その地域を支配する長沙王国の交通について、『史記』卷一〇六呉王濞列伝に

越直長沙者、因王子定長沙以北、西走蜀、漢中。
(越の長沙に直るは、王の子長沙以北を定むに因り、西のかた

蜀・漢中(おもむ)に走く)。

とある。もとより長沙南部は南越と境を接し、度々紛争に陥った。右によれば、長沙の王子が長沙北部の蜀・漢中に赴く道を安定させ、長沙の民の不安を解除させた。このように、長沙の北部から西へ向かうと、蜀・漢中への通路と接続する状況になっていた。およそ南郡もしくは黔中郡を経由すると想定されるが、前節の考察を踏まえれば、いずれにしても扞関を通過して長安に入るルートを利用できると推定される。ところが、長沙地域の地形を考慮すれば、長沙南部から長沙北部に向かうには、まず東進しなければならない。東から西へ向かつてそこから北へと転進する当該路線は、実際のところ遠回りの道である。加えて、扞関を経由しなくても武関を経由することを選択でき、当該路線は長沙から長安に向かう唯一のルートではない。もとより、長沙の地理上の位置付けは旧楚地域に属するものである。それを示す史料として、『史記』卷一二九貨殖列伝に

衡山・九江・江南・豫章・長沙、是南楚也、其俗大類西楚。

(衡山・九江・江南・豫章・長沙、是れ南楚なり、其の俗大いに西楚に類す。)

とある。長沙は楚の南部地域(南楚)に属し、その風俗は楚の西部地域(西楚)に近似すると記されている。更に傍証となるのは、秦

帝国が減じたのち、項羽封建の下で楚の義帝は長沙の郴県に徙されたことである。楚を国号とする義帝の封地を、長沙地域に設置したことを考慮すれば、長沙と楚国との関連性は楚の民に広く認識されるものであったと窺える。したがって、長沙の交通を考えるに際し、まずは旧楚地域内の連絡を考慮する必要がある。とりわけ、旧楚地域の中心部を継承した秦漢時代の南郡は、長沙との繋がりが強いように思われる。南郡には、武関を通過して霸水の南から酈山の西を経由して咸陽／長安に入る交通路がある。この武関ルートは、秦漢帝国の南方交通を支える主要路線である。『史記』卷六秦始皇本紀（二八年条）に

上自南郡由武関歸。

（上は南郡より武関に由りて歸す。）

とあるように、秦の始皇帝の巡行にも使用されていた交通路である。のちに、漢の元封五（前一〇六）年の武帝の南郡から江陵を通って東に向かう巡行も、この交通路を使用していたとされる。皇帝の巡行に使用された交通路であれば、きちんと整備されている道路に相違ない。長沙から三輔地域に向かうには、武関ルートを主要路線としていたと考えたほうが妥当であろう。現に、『史記』卷八高祖本紀（五年条）に

番君之将梅鋗有功、從入武関、故德番君。

（番君（呉芮）の将梅鋗功有り、從ひて武関に入り、故に番君を德とす。）

とあるように、秦末において劉邦軍に協力した呉芮の軍は、將軍梅鋗の引率のもとで劉邦軍とともに武関を通過して咸陽入城を果たしたとされる。長沙から咸陽に向かうに当たって、武関ルートを使用した実例であると言える。したがって、長沙を出発した旅行者は、扞関を通過する北上ルートの使用も可能であるが、扞関にとつて長沙地域との接続は、主要な目的ではないように思える。

三―二 南越王国

黔中郡の南は、桂林・象と隣接する。中華世界に組み込まれていなかった当該地域は、外縁地域として扱われ蛮夷とされる越の民が生活する空間となつてゐる。そこには強力な政治共同体は現れず、まとまりがなく様々な部族が点在する。そのあり方から、虚数の百を付けられて総じて百越と呼ばれる。戦乱の中では干渉できなかった外縁地域であるが、中華世界の統合を果たした秦帝国は、次第に軍事行動を用いて百越への進出をはかった。『史記』卷六秦始皇本紀に

三十三年、發諸嘗逋亡人・贅壻・賈人略取陸梁地、為桂林・象

郡・南海、以適遣戍。

（三十三年、諸々の嘗つての逃亡せる人・贅壻・賈人を發して陸梁の地を略取し、桂林・象郡・南海を為し・以て適して遣りて戍らしむ。）

とある。始皇帝の三三（前二一四）年に、秦は亡人（罪あつて逃亡していた者）・贅壻（入り婿）・賈人（商人）を動員して南方の地を攻略し、桂林・象・南海の諸郡を設置した。秦の南方攻略について、賈誼の『過秦論』に、

南取百越之地、以為桂林・象郡、百越之君俛首係頸、委命下吏。
（南のかた百越の地を取り、以て桂林・象郡と為し・百越の君は首を俛せ頸を係ぎ、下吏に委命す。）

とあり、『史記』の記述の補足になると考える。右記によれば、百越の地を征服した秦は百越の各部族の長を役人として任命し、百越の地を秦の支配体制に組み込んだ。秦の対越戦争について、史料は乏しく不明瞭な部分が多いが、秦―越の進出路線はおよそ次の史料から窺える。すなわち、『史記』卷一三南越列伝に

南海尉任囂病且死、召龍川令趙佗語曰、…秦為無道、天下苦之、吾欲興兵絕新道、自備、待諸侯變、会病甚。且番禺負山險、阻

南海、東西數千里、頗有中國人相輔、此亦一州之主也、可以立國。…囂死、佗即移檄告橫浦、陽山、湟谿関曰、盜兵且至、急絶道聚兵自守。

（南海尉の任囂病して且に死さんとし、龍川令の趙佗を召して語りて曰く、…秦無道と為り、天下之に苦しむ…吾兵を興し新道を絶ち、自ら備え、諸侯の變するを待たんと欲するも、会々病甚だし。且つ番禺山の險なるを負ひ、南海を阻み、東西すること數千里なり、頗る中國の人の相輔有り、此れ亦た一州の主なり、以て立國すべし、と。…囂死す、佗即ちに檄を移し横浦・陽山・湟谿関に告げて曰く、盜兵且に至らん、急ぎて道を絶ち兵を聚めて自ら守れ、と。）

とある。秦末の動乱に直面し、南海尉の任囂は部下の尉（趙）佗に「新道」を断ち切つて割拠するように遺言を残した。それに従つて、尉佗は任囂の死後に直ちに横浦・陽山・湟谿の三関の道を断ち切るように命令した。この文脈に鑑みれば、任囂が言う「新道」とは横浦・陽山・湟谿の三関の道であつたと見て差し支えなからう。この「新道」について、当該箇所に見える『史記索隱』の注釈は蘇林の言葉を引き、

秦所通越道。

（秦の越に通ずる所の道なり。）

とあり、秦越交通に使用されていた道だとされる。それに従えば、秦から越への進軍は、この「新道」すなわち横浦・陽山・湟谿の三関のルートを経由したと考えられる。戦争状態になるまで交流がなかった秦・越の間に、軍事行動に伴って右の交通路が開発されるようになったのであろう。この三関の位置について、諸家の考証によって大まかな位置が判明されている。以下は『史記索隠』と『水経注』の考証を参考し、譚其驤編『中国歴史地図集』(中国地図出版社、一九八二年)に従って三関の位置を特定する⁽²⁰⁾。

①横浦関について、

『史記索隠』に『南康記』⁽²¹⁾に云く、南野県大庾嶺より三十里にして横浦に至り、秦の時の関有り、其の下は謂ひて「塞上」と為す、と」とある。それに基づけば、横浦関は今の広東省南雄市の東北にある。

②陽山関について、

『史記索隠』に「姚氏案⁽²²⁾ずるに、地理志に云く、揭陽に陽山県有り。今此の県の上流より百餘里にして騎田嶺有り、当に是れ陽山関たるべし、と」とある。それに基づけば、陽山関は今の広東省陽山県の西北にある。

③湟谿関について、

または涯浦関に作る。⁽²³⁾『水経注』卷三八湣水篇に「湣陽県を過ぎ、

涯浦関を出で、桂水と合し、南のかた海に入る」とあり、『同』卷三九涯水篇に「南のかた涯浦関を出で、桂水と為す」とある。それに基づけば、湟谿関は湣水と涯水が交差するところであり、今の広東省英徳市の西南にある。

右記の三関の位置からして、秦・越を連絡する「新道」とは長沙郡と盧江郡を経由して南下するルートに該当する。鶴間和幸氏⁽²⁴⁾は秦の楚越支配は一本の南北ラインに支えられ、咸陽―武関―漢水―郢―湘水―灘水―番禺を下る形で進行していたと指摘する。この河川ラインを陸路で表示すれば、およそ咸陽―藍田―武関―南陽―南郡―長沙―盧江―越(南海・番禺)となる。後に前漢武帝の南越侵攻にも使用された当該路線は、水の力を活用し、人と物資を大量に西から東へと運べる設計となっていたのであろう。

ところが、秦の百越を支配する時期、及び始皇帝の巡行に越地の巡察はなかったとの事情から、『史記』卷一一三南越列伝に見える「新道」との名称からも窺えるように、この路線は新たに開発された交通路であると思われる。秦末漢初において、百越地域との交通はまだまだ模索の段階であつたと言える。武関を経由する右のルートは、必ずしも百越地域に進入する正規の交通路とは断言できない。秦の滅亡に伴い、百越の地は秦の支配から解放されるようになる。秦が越地に残した遺産を受け継ぎ、百越の地を支配したのは、前記に見えた尉佗である。すなわち、『史記』卷一一三南越列伝に

秦已破滅、佗即撃并桂林、象郡、自立為南越武王。

（秦已に破滅するや、佗即ち撃ちて桂林・象郡を并し、自ら立てて南越武王と為す。）

とあるように、尉佗は南海を拠点に西へ進出し、桂林・象を併合して南越王国を建立し自ら南越武王と称した。黔中郡に隣接する桂林・象との併合により、百越から扞関を通過して北上するルートが開通されるようになったと考えられる。

以上の情報を整理すると、漢の時代において中央部である三輔地域と百越地域を結ぶ通路はおよそ以下の二通りがある。

①長安―杜陵―子午道―漢中―庸―魚復―扞関―黔中―象―桂林―南海

②長安―藍田―武関―南陽―南郡―長沙／盧江―越（南海・番禺）

この二つの路線の中で、②の武関ルートは長沙地域を通過する必要がある。南越王国と長沙王国との険悪な関係（詳細は後述する）を考慮すれば、南越王国は①の扞関ルートをより重視したと推測される。

漢初において扞関の交通は、西は巴蜀地域、東は旧楚地域、南は黔中郡を経由して長沙王国と南越王国に通じる。帝国の中央部と周

縁地域ひいては外国政権を接続する役割があった扞関は、漢帝国にとって特別な意義を持つのであろう。その中で、巴蜀地域には更に西から長安に向かうルートがある。旧楚地域と長沙王国は武関ルートを正規な交通路とする。それらの環境と比べ、南越王国は扞関ルートの利用をより重視したと想定される。したがって、漢帝国が扞関重視した理由は、それを利用した南越王国との接続にあるのであろう。

四、符によって結ばれる漢越の外交

南越王国は秦の崩壊に伴って建国し、中華世界から独立した政権に成長していく。一方で、中華世界は秦末の動乱を経過し、楚漢戦争を経て漢帝国は全国支配を果たす。およそ同時期に建立した両政権の交流もまたいち早く開始されていた。漢越両国の外交関係は漢の高祖期からすでに始まった。『史記』巻一二三南越列伝に

漢十一年、遣陸賈因立佗為南越王、与剖符通使、和集百越、毋為南辺患害、与長沙接境。

（漢の十一年、陸賈を遣はして因りて佗を立てて南越王と為し、与に符を剖かちて使を通じ、百越を和集し、南邊の患害を為す母からしめ、長沙と境を接す。）

とある。右の記事から、漢皇帝の劉邦は南越と国交を結ぶために、まずは功臣の陸賈を派遣し尉佗の南越王としての地位を確定させた。その上で南越に符を分け与えて外交を行った。その結果、漢越両国の境目には平和がもたらされたという。ここで見える符は、よく知られるようにもちろん通行証であるが、当該時期の外交に関わる重要な物品でもある。伝世史料において、この種類の符は「国名」＋「符」の形で記載される（以下は国符と呼称する）ことが多い。国符とは、戦国時代の諸国が他国との国交を維持するため、自国の関所を通過させるための通行証である。それによって、各国は使者を送り合い、複雑な政治環境の中で交流し続けていた。⁽²⁵⁾ この事象は秦漢帝国に継承され、漢越の間に見える符にも同様な役割があつたと言えよう。中国古代社会には様々な通行証が存在する。その中で、⁽²⁶⁾ 富谷至氏は符は諸々の「わりふ」と機能を異とし、符の使用は関所の通過に限定されたものである。しかも、それは一定の関所を通過するにあたって、特定の用務において、封印の手間などの煩雑さを省略した簡易な通行証であると指摘する。氏の意見に従えば、漢と越の間で交換された符は、特定した関所のみ通過できる通行証である。本稿のいままでの考察を踏まえれば、漢と越との間で交換された符の使用箇所は、およそ①扞関ルートと②武関ルートのいずれかに絞ることは可能であろう。

この二つの路線の中で、先にも言及したように②の場合は長沙王国を通過する必要がある。長沙王国とは、異姓諸侯王国として前漢

の文帝期まで存続していた。劉氏との繋がりが薄い点から、諸侯王国としての独立性が強いと言われる。その独立性の強さは、南越との関係にも影響したように考えられる。吉開将人氏⁽²⁷⁾は南越王国と長沙王国との抗争は「霸王」的勢力同士の覇権争いという性質を備えたとする、首肯できる意見である。独立国として振る舞った長沙王国は、漢帝国とは無関係に南越王国と独立した外交を行った。その一端を窺わせた一文が次の史料に見える。『史記』卷一一三南越列伝に

高后時、有司請禁南越関市鉄器。佗曰、高帝立我、通使物、今高后聴讒臣、別異蛮夷、隔絶器物、此必長沙王計也。欲倚中国、撃滅南越而并王之、自為功也。於是佗乃自尊号為南越武帝、発兵攻長沙辺邑、敗数県而去焉。

（高后の時、有司請ひて南越の鉄器を関市するを禁ず。佗曰く、高帝我を立て、使物を通ぜり。今高后讒臣に聴きて、蛮夷を別異し、器物を隔絶す。此れ必ず長沙王の計なり。中国に倚りて撃ちて南越を滅ぼして并せて之に王とし、自ら功と為さんと欲するなり。是に於いて佗乃ち自ら尊びて号して南越武帝と為し、兵を發せて長沙辺邑を攻め、数県を敗りて去る。）

とある。呂后期の鉄器売買の禁制を受け、尉佗は長沙王国が漢帝国と協力して南越王国を滅ぼそうとしたと疑い、兵を動員して長沙王

国を攻撃した。この史料から、国境を接する南越と長沙は互いに疑心暗鬼の状態であり、険悪な関係にあったとわかる。同時に、長沙―越の関係は独立したものであり、漢―越の関係を平行しているように見える。漢が外交のために越に符を分け与えていたと同様に、長沙も外交の伝統に則って越に符を分け与えたと推測される。それぞれの符は、言うまでもなく自国の関所を通過させるためのものである。漢帝国・長沙王国・南越王国の三者はそれぞれ独立した外交を展開したならば、漢符と長沙符の使用区域は重ならないはずである。したがって、漢と越の外交関係に用いられた符は、長沙地域の通過を想定されず、扞関ルートを利用するためのものであったと推定できる。次の史料はその傍証となろう。「津関令」簡四九三に

□、制詔御史。其令諸関、禁毋出私金器・鉄。其以金器入者、関謹籍書、出復以関、出之。籍器、飾及所服者不用此令^{四九三}。
 (□、御史に制詔す。其れ諸々の関に令し、禁じて私金器・鉄を出だすこと母からしむ。其れ金器を以て入るるは、関謹みて籍書し、出るとき復た以て関し、之を出だす。器を籍するとき、飾り及び服する所は此の令を用ゐず。)

右記の「津関令」の条文は、本稿の冒頭に取り上げた簡四九二に続く簡四九三の条文である。その内容は、関外への輸出を禁止された物品を明記し、関中に輸入される金器への対処を明記した。とり

わけ、輸出を禁止された物品に關して、金器の他に鉄器にも言及される。その対象は、「其令諸関」とのみ記され、条文から対象を特定できない。しかしながら、この簡と簡四九二との接続を考えれば、簡四九二に取り上げられた五つの関所がそれに該当する可能性がある。「二年律令」に見える呂后二年における鉄器輸出の禁止と、『史記』に見える呂后期に禁止された南越との鉄器貿易、この両者は直結した関係のように見える。そして「関市」「関」などの語を媒介として『史記』と「二年律令」を併せて理解しようとすれば、その裏にある扞関の存在が浮かぶであろう。

戦国時代の国符は、史料の限界により政治外交の側面しか見えないうが、漢越の貿易関係を背景にして、扞関の通過に利用された符には経済的側面が見える。まず、漢から越への物流は次の史料から見える。『漢書』卷九五南粵伝に

高后時、有司請禁粵関市鉄器。…高后自臨用事、近細士、信讒臣、別異蠻夷、出令曰、毋予蠻夷外粵金鉄田器。馬牛羊即予、予牡、母与牝。

(高后の時、有司請ひて粵の鉄器を関市するを禁ず。…高后自ら用事に臨み、細士を近づけ、讒臣を信じ、蛮夷を別異し、令を出だして曰く、蛮夷外粵に金鉄田器を予へ母からしめ。馬牛羊即し予ふれば、牡を予へ、牝を与へること母からしめ、と。)

とある。前記『史記』巻一一三南越列伝の引用と同様の箇所該当するが、呂后期における鉄器貿易の禁止を記されているほか、馬・牛・羊などの動物売買への制限も言及されている。それによれば、金・鉄の売買は禁止されたが、馬・牛・羊などの動物の売買はオスのみが許される。越地で動物が繁殖しないように、メスの売買を禁じ貿易に規制をかけたのであろう。この事柄から、漢越の外交関係の下で、越は漢帝国から金器・鉄器・馬・牛・羊など、日常生活を支える物資を輸入していた側面が窺える。一方で、越から漢への物流は次の史料から見える。『淮南子』巻一八人間訓に

又利越之犀角・象齒・翡翠・珠璣、乃使尉屠睢發卒五十万、為五軍、一軍塞鐔城之嶺、一軍守九疑之塞、一軍處番禺之都、一軍守南野之界、一軍結餘幹之水。三年不解甲馳弩。

(又た越の犀角・象齒・翡翠・珠璣を利とし、乃ち尉の屠睢をして卒五十万を發し、五軍と為し、一軍は鐔城の嶺を塞ぎ、一軍は九疑の塞を守り、一軍は番禺の都に處り、一軍は南野の界を守り、一軍は餘幹の水を結ばしむ。三年にして甲を解かざりて弩を馳めず。)

とある。右記によれば、秦は越から利益を得ようとし、尉の屠睢を派遣して越を攻略した。その際に、秦が目当てとした越の「利」について、犀角・象齒・翡翠・珠璣などの珍宝の名称が取り上げられ

た。秦に続く漢の時代においても、中華世界では入手し難いこれらの珍宝は需要があろう。したがって、限られた史料の中で漢越貿易の全貌が見えないが、少なくとも越は漢から日用品、漢は越から贅沢品を入手し、互いに利となるものが売買されていたのであろう。そして、この貿易関係を結び合わせたのが、符の存在であると考えられる。外国政權との貿易において、符の必要性は次の史料から窺える。『漢書』巻五〇汲黯伝に

匈奴渾邪王帥衆來降。後渾邪王至、賈人与市者、坐当死五百餘人。：黯入：曰、：愚民安知市買長安中、而文吏繩、以為闐出財物如辺関乎。陛下縱不能得匈奴之贏以謝天下、又以微文殺無知者五百餘人、臣竊為陛下弗取也。

(匈奴の渾邪王衆を帥ゐて來降す。後に渾邪王至り、賈人^{ふり}与に市する者、坐として死に当たるもの五百餘人。：黯入りて：曰く、：愚民安くんぞ市して長安中^{ちやん}に買ひ、而して文吏繩し、以て財物を闐出すると為して辺関の如きを知らんや。陛下縱ひ能く匈奴の贏を得て以て天下に謝せざれど、又た微文を以て無知なる者五百餘人を殺せば、臣竊かに為ふに陛下の取らざる所なり、と。)

とある。前漢の武帝期に匈奴の渾邪王は漢に降伏し、関外から漢の都長安に入朝した。渾邪王が長安に入城した際に、彼と商売したこ

とて死罪を問われた者が五百人余りいた。その理由は、渾邪王の所属は関外であり、彼との商売は物品を関外に売り出すことと同義である、とのことと考えられる。したがって、漢帝国の法的手続きを経過しなければ、関外の者との商売は法律によって禁止されている。右に見える汲黯の諫言から、当該事件で罪を問われた者は「闐出財物」⁽²⁸⁾の規定に抵触したとわかる。この「闐出財物」について顔師古の注には臣瓚の言葉を引き、

無符伝出入為闐也。

(符伝無きて出入するは闐と為るなり。)

とある。それによれば、渾邪王事件で下された処罰は通行証である符・伝の規定に関連する。それを手掛かりにすれば、『睡虎地秦簡』『法律答問』簡一八四に

客未布吏而与賈、賈一甲。可(何)謂「布吏」・詣符伝於吏是謂「布吏」。

(客未だ布吏せずしてともに買えば、賈に一甲。何を「布吏」と謂ふか。・符伝を吏に詣すこと是れ「布吏」と謂ふ。)

とある。右記のように、符・伝などの通行証の所持者はそれを役所に提出(布吏)するまで、商売してはいけないと秦代の律令に規定

されていた。そして秦律を継承した漢律も、この規定を継承した可能性が高い。すなわち、地域を越えた貿易では物品の出所を明白とさせる必要がある。通商ルートを確認するため、商人は通過した関所を記した通行証を役所に提出する必要があった。渾邪王の事例を鑑みれば、この律令規定は国内のみならず、国外にも適用されると推定できる。ただし、処罰対象は律令によって束縛される自国の民のみとなつていたのであろう。

これらの情報を総合すると、漢越の貿易は扞関の通過を必須条件としている。漢帝国から南越王国に分け与えられた符は、越から漢への移動路線を限定した。複数の移動路線が存在する中で、扞関ルート⁽²⁹⁾の指定は南越王国と険悪な関係にある長沙王国との接触を避ける効果があったと言える。南越王国は鉄や馬などの日用品を中華世界から輸入する必要があるものの、漢に決められた移動路線を使用しその証明となる符を提出しなければ、商売する資格を得られない。漢越の貿易は交通上の規制を強いられていたことがわかる。したがって、漢帝国は符を通じて境界線上の紛争を減らすことができたのであり、交通から派生した権力を用いて直轄地以外の地域に干渉したと言えよう。

五、扞関の管轄形態——諸関所と合わせて——

ここまでの考察では、扞関と首都との交通関係を検討していく中

で、南越との連絡は扞関の重要な役割の一つであると推定した。その上で、漢越の外交及び貿易関係について論じた。本節では、周縁地域との接続において、扞関が如何にその機能を果たしたかを考えてみたいと思う。

まず、前記の『漢書』卷二八地理志上(巴郡条)に「江関、都尉の治むる所なり」とあるように、扞関は都尉が管轄するところであった。これと類似する条文として、『漢書』卷二八地理志下敦煌郡条に

有陽関・玉門関、皆都尉治。

(陽関・玉門関有り、皆な都尉の治むるところなり。)

とあり、同年代の陽関と玉門関も都尉が管轄していたとわかる。加えて武関と函谷関も都尉に管轄されていたと、伝世史料の記事に散見する。したがって、全ての関所に対して一概に言えるか否かは更なる検証を必要とするが、漢代の官僚制度において都尉が関所を管轄していた側面があると指摘できる。関所を管轄する都尉について、『漢書』卷六〇杜欽伝に

(杜業) 復為函谷関都尉。

(杜業) 復して函谷関都尉と為す。)

とあり、『漢書』卷六九辛慶忌伝に

中子遵(辛遵) 函谷関都尉。

(中子の遵(辛遵) 函谷関都尉たり。)

とあり、『漢書』卷七六張敞伝に

(張敞) 復出為函谷関都尉。

(張敞) 復して出でて函谷関都尉と為す。)

とあるように、「函谷関都尉」の名称は『漢書』に散見する。それを手掛かりにすれば、『漢書』卷一九百官公卿表上に

関都尉、秦官。農都尉、属国都尉。皆武帝初置。

(関都尉、秦官なり。農都尉、国都尉に属す。皆な武帝初めて置く。)

とあり、「関都尉」の役職は秦の時代より設置され、名称からすれば関所を管轄する専門職のように見える。ところが、百官公卿表には関都尉の職掌についてその詳細に言及しておらず、その実態は不明瞭である。そもそも都尉の名称が付く官職は伝世史料に多くみられ、その実態も多岐にわたる。史料の限界により、関所を管轄する

都尉の実態を特定するには困難であるが、かつて鎌田重雄⁽²⁹⁾氏は、内郡地域・三輔地域・辺郡地域の三地域別に都尉の職掌を考察する中で、それぞれの地域の都尉は幾分の変改が見られるも、都尉の職掌は三者を通じての一般的規制であると指摘する。氏の意見に従えば、多岐にわたる「○○都尉」の職も、都尉を原点に発展したものであり、関都尉に都尉の職掌と通じる一般的規定は存在する。この仮説の傍証として、次の史料に見える「備塞都尉」を取り上げたいと思う。「津関令」簡五二三～簡五二四に

廿三、丞相上備塞都尉書、請為夾谿河置関、諸漕上下河中者、皆發伝。及令河北界為亭、与夾谿関相直。・闌出入、越之、及吏^{五二三}卒主者、皆比越塞闌関令。・丞相、御史以聞、制曰、可^{五二四}。

（廿三、丞相の備塞都尉の書を上まつて、請ふに夾谿の河の為に関を置き、諸れ漕もて河中を上下するときは、皆な伝を發す。及び河の北の界をして亭を為り、夾谿の関と相い直さむ。・闌出入するもの、之を越えるもの、及び吏・卒・主者は、皆な越塞闌関令に比はんことを、と。・丞相、御史以聞す。制して曰く、可なり、と。）

とあり、備塞都尉と関所との関係を記している。右記の条文によると、備塞都尉より上申された提言が朝議で採択され、夾谿河の管轄

のために関所を設置することになった。関所の設置後における出入りの規定は新たに設けることなく、以前中央が制定した「越塞闌関令」に比準するように、とのことである。中央政府の指示には、新たに関所を管轄するための役職を設置することについて言及されておらず、新設される夾谿の関は備塞都尉に一任し、律令の規定に沿って管轄するように示した。ここで見える備塞都尉とは、「二年律令・秩律」簡四四〇～四四一に

御史大夫・廷尉・内史・典客・中尉・車騎尉・大(太)僕・長信詹事・少府令・備塞都尉・郡守・尉・□(衛)將軍・□(衛)尉、漢^{四四〇}中大夫令、漢郎中・奉常、秩各二千石。御史【丞】・丞相・相国長史、秩各千石^{四四一}。

(御史大夫・廷尉・内史・典客・中尉・車騎尉・大(太)僕・長信詹事・少府令・備塞都尉・郡守・尉・□(衛)將軍・□(衛)尉、漢中大夫令、漢郎中・奉常、秩各おの二千石。御史【丞】・丞相・相国長史、秩各おの千石。)

とあるように、郡尉と同等の二千石の高級官僚である。『後漢書』列伝第七一独行列伝(彭脩伝)の「後に郡に仕えて功曹と為し、時に西部都尉の宰量は太守の事を行る」に引く応劭の『漢官儀』に、

都尉、秦官也。本名郡尉。掌佐太守典其武職、秩比二千石。孝

景時更名都尉。

(都尉、秦官なり。本名は郡尉なり。太守の其の武職を典どるを佐けるを掌り、秩は比二千石なり。孝景の時に名を都尉に更む、と。)

とある。それによれば、郡尉とは都尉からの改称である。官名の改称は漢初によく見られる事象であり、多くの場合改称の前後において役職の性格上の変化は見られないように思われる。以上を踏まえれば、都尉—関都尉—備塞都尉の三者の間には、職掌上に共通するものがあるように考えられる。ちなみに、都尉と関都尉は同じく光武帝の建武年間に役目を終え、廃置するようになった。これも両者の類似性に関連する事象であろう。

以上の推論に大過がなければ、扞関の管轄を任された都尉の職掌は、郡尉のそれに比準すると見て差し支えなからう。郡尉の職掌について、伝世史料には次のように記している。『漢書』卷一九百官公卿表上に

郡尉、秦官、掌佐守典武職甲卒、秩比二千石。有丞、秩皆六百石。景帝中二年更名都尉。

(郡尉、秦官なり、守の武職甲卒を典どるを佐けるを掌り、秩は比二千石なり。丞有り、秩は皆な六百石なり。景帝中二年に名を都尉に更む。)

とある。右記に見えるように、都尉の職掌は主に軍事面から太守を補佐することである。『北堂書鈔』卷六三設官部・都尉一〇一⁽³⁰⁾に「太守を佐けて副将と為す」とあり、その注に引く『漢官解詁』⁽³¹⁾に「都尉、郡各おの一人、太守の言を副佐す。太守と与に俱に銀印を受け、符を部けて任に之き、一郡の副将なり」とある。都尉は任務の遂行にあたって、符を分け与えられていると記されている。そこから推論すれば、扞関を管轄する都尉も符を所持し扞関の管轄を行ったと推定できる。ここで見える符は、前記で言及したように関所の通行証であれば、扞関を管轄する都尉が所持する符は、当然扞関を通過するための符である。したがって、扞関を管轄する都尉は扞関の内外を自由に通過できる権限を持ち、それを用いて扞関防衛と任務を完遂させた。言うなれば、軍事権の委任に伴う交通権の譲渡の一端を示しているのであろう。具体的には、『太平御覧』卷二四一・職官部三九・都尉に引く『漢官解詁』に「都尉は兵を將ゐ、太守を副佐す。盜賊に備ふるなり」とあるように、外国からの侵攻だけではなく、国内の盜賊の類に警戒する役目があった。盜賊とは、国家にとつての不安定要素であれば、蠻夷とされる巴蜀や越などの外族や、前記に見える秦から南越への遷民も含まれよう。確かに、『史記』卷二二九貨殖列伝に

秦末世、遷不軌之民於南陽。南陽西通武関、郾関、東南受漢・

江・淮。

（秦の末世、不軌の民を南陽に遷す。南陽の西は武関・鄖関に通じ、東南は漢・江・淮を受く。）

とあり、秦は武関、鄖関の外側に「不軌の民」を移住させた記事が見られる。関所の外側に不安定要素となる対象を置き、その逆襲を予防する役目は関所にあつたと推測できる。「津関令」に見える「越塞闕関」の表現とは、関所なる定点の通過と塞なる境界線の超越を含む。地域と地域との往来には、点と線の両方面から通過規定を設けられる。前記「津関令」簡五二三～簡五二四に見える來谿関と河水（黄河）の關係には、関所と河からなる点と線の關係が見える。洛水沿いにある臨晋関、河水沿いにある函谷関、丹水沿いにある武関、沔水沿いにある鄖関も、その關係に準じて機能していたように思える。したがって、江水沿いにある扞関は、定点の通過チェックのみではなく、江水を線として防衛ラインを敷き、関中地域の外側を警戒する役割を持つ。

国防などの軍事目的の他に、関所は関税徴収を目的に設けられたと言われる。³²⁾ その税収こそ関所の運営を支える根底的なものであると言える。関所の運営と税収との關係は次の史料から窺える。『漢書』卷六武帝紀（太初四年条）に

徙弘農都尉治武関、税出入者以給関吏卒食。

（弘農都尉を徙して武関を治めしめ、出入する者に税し以て関の吏卒の食に給ふ。）

とある。弘農都尉の管轄下にある武関は、武関を通過する税収を用いて関所に務める官吏を養つたというので、税金の収入は武関の運営を支えた側面が窺える。³³⁾ 扞関の場合では、本稿が考察してきたように巴蜀―南郡の物資輸送と、漢―南越の鉄・動物の売買があつた。その貿易で徴収した税金によって、扞関の運営を成り立たせたのではないかと考えられる。地域を越えた貿易形態の中には、前記の「関市」語が示したように、関所の管轄下において売買を行う市場があつた。この関市に關連する律令規定、いわゆる「関市律」は簡牘史料からいくつか見られる。次はその一例を取り上げる。「二年律令・関市律」簡二六〇～簡二六一に

市販匿不自占租、坐所匿租贓為盜、没入其所販売及賈錢梟官、奪之列。列長・伍長弗告、罰金各一斤。嗇夫^{二六〇}・吏主者弗得、罰金各二兩。諸詐給人以有取、及有販売・賈買而詐給人、皆坐贓与盜同濃、罪耐以下^{二六一}。

（市販するに匿して自ら占租せざるは、匿する所の租贓を坐として盜と為し、其の販売する所のもの及び賈錢を梟官に没入し、之を列より奪う。列長・伍長の告げざるは、罰金各々一斤。嗇

夫・吏主者の得ざるは、罰金各々二兩。諸れ人を詐給して以て取る有り、及び販売・買買して人を詐給する有るは、皆な贓に坐して盗と同濃、罪の耐以下は…)

とある。市で販売する者が利益を隠匿した場合は、その商品や売上金を没収するように規定されている。関市における売買は、役人の管轄の下で行われていたと窺える。管理責任を追及されて罰金刑を加えられる対象に、鬻夫の名称が見られる。ここで見える鬻夫は、「関市律」の記載対象からして、いわゆる関鬻夫のことを指す。『居延漢簡』などにも名称が見られ、関都尉の所屬である。⁽³⁴⁾したがって、扞関を管轄する役人は、扞関での貿易を仲裁し、その貿易の中で得た利益から税金を徴収し、関所の運営に当たったと推論できる。もちろん、

ウ. 『睡虎地秦簡』「秦律十八種」簡九七

為作務及官府市、受錢必輒入其錢𧔸中、令市者見其入、不從令者贄一甲 関市

(作務を為するに官府の市に及べば、錢を受けて必ず輒ち其の錢を𧔸中に入れ、市の者をして其の入るを見せしめ、令に従はざる者は贄に一甲 関市)

エ. 『岳麓秦簡(肆)』簡二四三

関市律曰、県官有売買毆、必令令史監、不從令者、贄一甲。

(関市律に曰く、県官売買有るや、必ず令史をして監せしめ、令に従はざる者は、贄に一甲。)

などの史料が示したように、官府が介在する関市の貿易は公平性を保とうとする国家意思が見られる。ウ. の史料から、公務上の売買など官府を対象とする貿易は、官府側は売り上げで得た金錢を𧔸(かめ)に入れ、市場中の人々に見えるように振り舞うという、貿易の透明性を高める意図が見られる。エ. の史料から、県の役人は関市で売買を行う時に、必ず文書官である令史に随行してもらうように行動するという、権力者を抑制して貿易の公平性を尊重する意図が見られる。このように、関市の運営には関所の役人が関与し、貿易が公平に行われるように監督されている。扞関の場合は、漢越を含めた貿易による税収がその運営を支える側面があったと推定され、漢越外交の状態は扞関の存亡(満足に機能するか否か)に関わる。中国古代国家において、貿易と外交の両者は表裏一体の関係である。ちなみに、「二年律令・関市律」簡二五八〜簡二五九に

販買繪布幅不盈二尺二寸者、没入之。能捕告者、以畀之。絺綌、縞繻、纁緣、朱纁、罽、縹、布、縠、莖、蕞、不用此律^{二五九}。

(繪布の幅二尺二寸に盈たざるものを販買するは、之を没入せ

よ。能く捕へて告げる者、以て之を畀す。締緒、縞繡、纁縁、朱纁、罽布、縹布、縹、荃蓂は、此の律を用ゐず。）

とあるように、⁽³⁵⁾荃など南方地域（現代の広州・潮州）の物産で、越の支配領域に属するものが漢の律令規定に見られ、漢越の間で貿易が行われたことを強く示唆する。

六、終わりに

本稿は「二年律令・津関令」に見える扞関を対象に考察を加え、扞関の秦漢帝国にとつての特殊性・重要性について検討した。その結果はおおよそ以下の数点に集結する。

- ・ 扞関は戦国楚によつて設置され、秦の併合を経て漢の支配下に置かれた。
- ・ 扞関は東西の交通を繋ぐ役割だけではなく、南北の交通を繋ぎ漢帝国の首都圏と南方の周縁地域を連絡する役割があつた。
- ・ 扞関を要所とする漢代の南方交通は、巴蜀地域・旧楚地域・長沙王国・南越王国との連絡が見られ、その中で越との接続は最も重要なものであつたと推定される。

・ 漢越の国交には符が介在し、特定の関所しか通行できない限定的な通行証である符を用いて、漢は越との交通路線を制限し周縁地域

の紛争を抑止する意図が見られる。

・ 漢代関所の運営は地方に一任し、そこで徴収した税金を関所の運営に当たらせた。関所の存亡は、当該地域の貿易状況及び国家の外交状況に左右される側面があつた。

このように、扞関は秦漢帝国の中央部と南方の周縁地域との接続に関連する。関中地域の最南部に位置する扞関に視点を置くと、漢帝国とその国外政権との繋がりが見えてくる。とりわけ、関中地域——関外に置かれる緩衝地域——外国政権との関連性から、関中の民——中華の民——周縁地域の民（蛮夷）からなる一種の「世界システム」⁽³⁶⁾を背景に、直轄地を中心として外へと勢力が拡大していく漢帝国の支配原理の一端が潜んでいるよう。

時代が進行するにつれて、前漢武帝以後に漢帝国は南越を征服し、東南地域は一気に開発されるようになった。同時に、張騫の活躍をはじめとする西南夷道の開発に伴い、西南地域の交通も飛躍的な発展を迎えた。この状況の中で、扞関の漢帝国に対する重要性の低下は想像に難くない。伝世史料に散見する前漢中葉以後の各関所の位置移動から、漢の初期から中葉にかけての変遷を受け、扞関を含めた国内多くの関所は定位を改められたとわかる。都尉（関都尉）の官もそれに応じて、後漢の光武帝年間に廃止されるようになったと考えられる。本来江水北部まで引かれた関中地域の勢力範囲も、中央部と南方との連絡の必要性が低下していく中で衰退していき、や

がて近畿まで収縮されるようになり、扞関は関中地域の基準から外された理由となろう。そうした発展の中で、本稿冒頭に取り上げた『史記索隱』の注に「東は函谷、南は嶢武、西は散関、北は蕭関。四関の中に在り、故に関中と曰ふ」とあるように、漢帝国の目線は途中から散関や蕭関など、西北方向へ向けられるようになった。当該時期における西北地域の交通と漢帝国の形成と発展との関係性を、今後の課題にしたいと思う。

注

- (1) 一九八三年、湖北省荊州市荊州区紀南鎮張家山の二四七号漢墓から大量の竹簡が出土し、その内容を整理して図版・釈文を掲載した張家山二四七号漢墓竹簡整理小組編『張家山漢墓竹簡(二四七号墓)』(文物出版社、二〇〇一年)が刊行された。やがて中国内外の釈文研究の進展を受け、同整理小組編『張家山漢墓竹簡(二四七号墓)(釈文修訂本)』(文物出版社、二〇〇六年)が刊行された。張家山漢墓の竹簡群の中には「二年律令」と総称されるものがある。簡牘の条文から、前漢初期の呂后二年に施行された法律であると推定され、前漢初期の法律条文で、はじめて体系的な漢律が発見されたことで珍重される。「二年律令」の解説をより進展させるため、武漢大学・荊州博物館・早稲田大学の日中共同研究で、赤外線カメラによる竹簡の撮影が行われ、その成果として『二年律令与奏讞書——張家山二四七号漢墓出土法律文献釈読』(上海古籍出版社、二〇〇七年)が刊行された。本稿で引用する「二年律令」の条文は、二〇〇七年版の図版(赤外線版)の釈文を底本とする。
- (2) 富谷至編『江陵張家山二四七號墓出土漢律令の研究・譯注篇』

(朋友書店、二〇〇六年)に、「整理小組が「以下缺簡」と注する通り、条文は中途半端なところで終わる。これに続く簡があったはずである」とある。

- (3) 王子今・劉華祝「説張家山漢簡『二年律令・津関令』所見五関」『中国歴史文物』第一期、四四頁〜五二頁、二〇〇三年

- (4) 『史記』卷六秦始皇本紀(三五年条)に「於是立石、東海上胸界中、以為秦東門」とある。

- (5) 藤田勝久「戦国秦の領域形成と交通路」『中国古代国家と郡県社会』(汲古書院、二〇〇五年)第一編第二章七四頁〜一二三頁を参照。

- (6) 漢書卷二八地理志上左馮翊条に「臨晋、故大荔」とある。その注に「臣瓚曰、晋水在河之間、此県在河之西、不得云臨晋水也。旧説曰、秦築高壘以臨晋国、故曰臨晋也」とあり、「師古曰、瓚説是也。説者或以爲魏文侯伐秦始置臨晋、非也。文侯重城之耳、豈始置乎」とあるように、臨晋関は三晋地域への進出をはかるため、秦によって設置された関所である。

- (7) 『史記』卷一二九貨殖列伝に「南陽西通武関・郿関、東南受漢・江・淮」とあり、『史記正義』の注釈に「蓋「郿」当為「洵」。洵水上有関、在九州洵陽県。：洵、亦作「郿」、与郿相似也。」とあるように、郿関または郿関に作る。案ずるに、『史記』卷九五酈商列伝に「別將攻旬関、定漢中」とあり、蓋し郿関もまた旬関に作る。

- (8) 陳直『史記新證』(中華書局、二〇〇六年)楚世家第十、九一頁を参照。

- (9) 呉式芬・陳介祺『封泥攷略』(中国書店、一九九〇年)卷四、五三頁・裏五五四頁・表を参照。

- (10) 『後漢書』列伝第七岑彭伝に「留威虏將軍馮駿軍江州」とあり、同条の考証は沈欽韓『後漢書疏證』(上海古籍出版社、一九九五年)

- に「江州、今重慶府巴県。疑馮駿此時未能越巴峽也。当江関之誤、即捍関也」とある。
- (11) 巴郡、秦置。…魚復、江関、都尉治。有橘官。
- (12) 木村正雄『中国古代帝国の形成―特にその成立の基礎条件―(不味堂書店、一九六五年(比較文化研究所、二〇〇三年))第四章第一節五六七頁、五七一頁、第四章第二節七七九頁、七八一頁を参照。
- (13) 藤田勝久「後漢時代の交通と情報伝達―褒斜道の石刻をめぐって」『中国古代国家と情報伝達』(汲古書院、二〇一六年)第二編第一〇章五六三頁を参照。
- (14) 『後漢書』本紀第六順帝紀に「乙亥、詔益州刺史罷子午道、通褒斜路」とある。
- (15) 久村因「秦の上庸郡について」(『東方学』第二十一号、三八頁、四九頁、一九五五年)や「楚・秦の漢中郡に就いて」(『史学雑誌』第六五号、四六頁、六一頁、一九五六年)などを参照。
- (16) 久村因氏は咸陽/長安の南下通路を検証する中で、関中地域と子午道との接続について既に詳細な考証を加えられた。詳細は「秦漢時代の入蜀に就いて(上)」(『東洋学報』第三十八号、一七八頁、二〇八頁、一九五五年)や「秦漢時代の入蜀に就いて(下)」(『東洋学報』第三十九号、三二四頁、三六二頁、一九五六年)などを参照。
- (17) 山田勝芳昭和六三・平成元年・平成二年度科研費報告書「秦漢税役制の研究」(一九九一年)の「関税」の項で本稿の概略を述べている。詳細は「関税」『秦漢財政収入の研究』(汲古書院、一九九三年)第五章第五節四四七頁、四四八頁を参照。
- (18) 地理上において、黔中の西には西南夷との接続はあるが、『漢書』卷二四食貨志下に「唐蒙、司馬相如始開西南夷、鑿山通道千余里、以広巴蜀、巴蜀之民罷焉。」とあるように、西南夷との交通は武帝期以後に開発されたものである。戦国時代から設置された扞関と時代が離れるため、本稿は西南夷の考察を省く。
- (19) 陸梁とは南方の地を意味し、すなわち百越の地を指す。本稿で引用した『史記』卷六秦始皇本紀三年条の条文に対し、『史記索隱』は「謂南方之人、其性陸梁、故曰陸梁。」と注を付け、『史記正義』は「嶺南人多処山陸、其性強梁、故曰陸梁。」と注を付けた。
- (20) 本稿は扞関を対象に考察することに力点を置き、「新道」に当たる三関の考察は先学の研究に譲り論証を省く。
- (21) この条文は佚文である。鄧德明『南康記』(陶宗儀等編『說郛三種』(上海古籍出版社、一九八八年)卷六一、二八二四頁、二八二六頁所収)に当該条文は見当たらない。或いは、これは劉嗣之『南康記』を指す。『通典』卷一八二州郡二大庾条に「劉嗣之『南康記』云、昔漢楊僕討呂嘉、出章郡、下横浦、即今県西南、故横浦廃関見在此」とあり、当該条文との類似性が認められる。
- (22) この条文は佚文である。南朝陳の姚察『漢書訓纂』(全三〇巻)にある一文だと推定されるが、当該史料は現存しない。当該史料の詳細について、脇州武志「姚察『漢書訓纂』とその受容」『東洋文化』(無窮会)復刊第一一三号、四四頁、五八頁、二〇一六年を参照。また、『漢書』卷二八地理志下南海郡条に掲陽の地名を確認できるが、陽山県を記した条文は確認できない。
- (23) 詳細な論述は譚其驤「馬王堆漢墓出土地図所説明的幾個歷史地理問題」(『文物』第六期、二〇頁、二八頁、一九七五年)を参照。
- (24) 鶴間和幸「秦帝国の統一と南方世界―楚越世界」『秦帝国の形成と地域』(汲古書院、二〇一三年)第一編第二章一六五頁、一八一頁を参照。
- (25) 詳細は拙稿「符の政治的意義―専制権力と交通との関係に就いての考察―」(『学習院史学』第五十六号、八一頁、九八頁、二〇一八年)を参照。

- (26) 富谷至「通行行政―過行証と関所」『文書行政の漢帝国』(名古屋大学出版会、二〇一〇年) 第三編第二章二九九頁〜三〇〇頁を参照。
- (27) 吉開将人「印からみた南越世界―嶺南古璽印考」(前篇・中篇・後篇)『東洋文化研究所紀要』(第一三六号、八九頁〜一三五頁、一九九八年/第一三七号、一頁〜四五頁、一九九九年/第一三九号、一〜三八頁、二〇〇〇年)を参照。
- (28) 「關出財物」の規定は、「津関令」簡四八八〜簡四九一に見える「越塞關関」の規定と関連し、兩者ともに伝符に関わるものである。「津関令」簡四八八〜簡四九一の解釈について、拙稿「符の政治的意義―専制権力と交通との関係に就いての考察」(前掲) 八九頁〜九〇頁を参照。
- (29) 鎌田重雄「郡都尉」『秦漢政治制度の研究』(日本学術振興会、一九六二年) 第二編第六章三〇四頁〜三二八頁を参照。
- (30) 虞世南『北堂書鈔』(中国書店、一九八九年) 一二四頁を参照。
- (31) 本稿が参照した『北堂書鈔』(前掲) は光緒一四年南海孔氏刊本を底本とし、引用史料に「漢官解故」とある。また、四庫全書版『北堂書鈔』(卷六三・一三頁) では「漢書解詁」とある。案ずるに、『隋書』卷三三「經籍志」職官篇に「漢官解詁三篇、漢新汲令王隆撰、胡廣注」とある。本稿はこれに従って「漢官解詁」の名称とする。
- (32) 佐藤武敏「先秦時代の関と関税」(『甲骨学』一〇、一五八頁〜一七三頁、一九六四年)などを参照。
- (33) 顎君啓節(舟節)の銘文に「不見其金節…則政(徵)於大府、母政(徵)於關」とあり、戦国楚の国家財政(大府)と関税は分離していると思われる。秦漢帝国の財政状況とも関連しているように思われるが、不明瞭な部分が多いため今後の課題にしたい。
- (34) 畜夫の詳細について、大庭脩「漢の畜夫」『秦漢法制史の研究』(創文社、一九八二年) 第四編第四章四九七頁〜五二三頁を参照。

関畜夫については同五〇四頁を参照。都尉と畜夫の関係について、永田英正「簡牘よりみたる漢代邊郡の統治組織」『居延漢簡の研究』(同朋舎出版、一九八九年) 第四章四一三頁〜四一四頁などを参照。

(35) 『漢書』卷五三「景十三王伝」(江都易王非条)に「遣人通越繇王閼侯、遣以錦帛奇珍。繇王閼侯亦遣建荃・葛・珠璣・犀甲・翠羽・蜺熊奇獸、数通使往來、約有急相助」とあり、荃・葛の解釈について顔師古注に「許慎云、荃、細布也、字本作綰。…蓋今南方筍布之属、皆為荃也。」とあり、南方の植物であると説明する。また、沈欽韓『漢書疏証』(上海古籍出版社、二〇〇六年) 卷二八(五〇頁裏〜五一頁表)は『寰宇記』と『広東新語』を引用し、荃は広州や潮州の芭蕉布・竹布などであると解釈する。

- (36) イマニユエル・ウオーラスティン著(川北稔訳)『近代世界システム―農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』第二章七五頁〜一五〇頁、第七章四〇八頁〜四一一頁を参照。

ENGLISH SUMMARY

The Southern Transportation Connected By Yu Pass - The Effect Of Fu On The Han-Yue Diplomacy CHONG Chenkun

According to the investigation of the *Ernian Luling*・*Jinguan ling*, this paper analyses the importance and specificity of the Yu Pass for the Han Empire. Fu, the cross-border pass which issued by the Han Empire, was crucial as influencing the diplomacy between the Han Empire and empires nearby Yu Pass, and the distant governance of the Han empire.

Historical references indicated that Yu Pass not only exist as the connection between the east-west territory but also linking up the north-south territory, which from the capital of Han Empire to the border area of

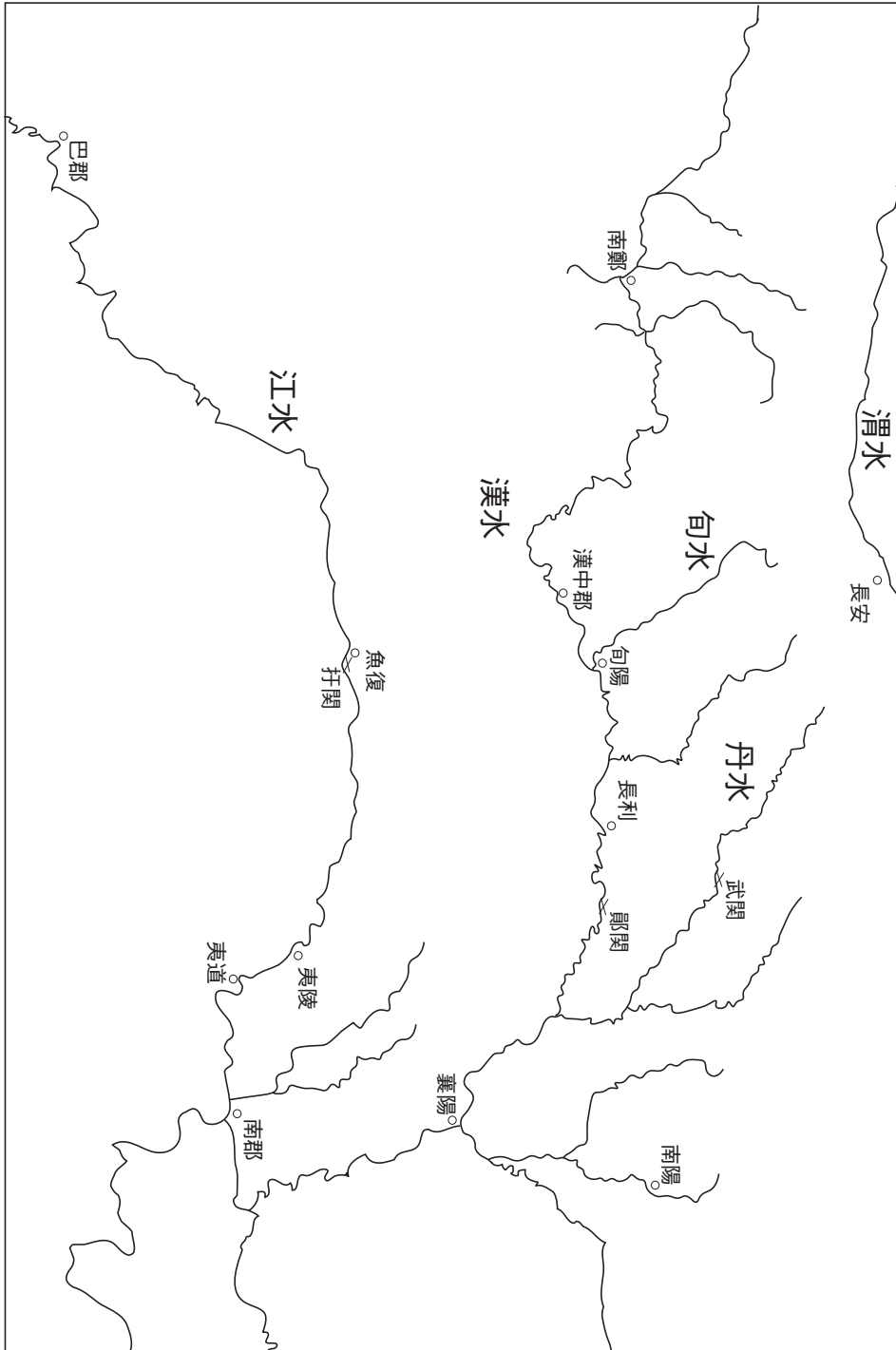
southern territory.

The diplomacy between the Han Empire and the Nanyue Kingdom were established by the bestowment of the Fu. Since the particular Fu could be only applicable for the relevant checkpoint, the issue of Fu has restricted the itinerary of the north-south transportation. It could reveal the intention of inhibiting the turmoil in the border area.

Every Han's checkpoints were self-managed. The officials in Yu Pass would levy tax from Nanyue Kingdom's travellers so as to maintain their operation. Therefore, the existence of a checkpoint would be determined by the trade and the diplomacy. Accordingly, the extermination of the Nanyue Kingdom also leads to the neglect of the Yu pass.

Key Words: Yu Pass, Fu, Han-Yue Diplomacy, Du Wei, Guan Shi

【図 1】 扞関の地理環境図



譚其驤編『中国歴史地図集』第二冊 (中国地図出版社、一九八二年) を基に作成